

同で、バングラデシュにおける現地調査を実施しています。一方、研究室ではリーシュマニア症の感染防御機構を分子レベルで解明し、遺伝子編集によるワクチン開発を行っています。リーシュマニア症はサシチョウバエが媒介する寄生虫疾患で、熱帯、亜熱帯、南ヨーロッパなど、90カ国以上で約1200万人の感染者がいると推計されています。それだけにワクチンの開発は重要です。

またアメーバ赤痢についても、動物モデルでの研究で、感染防御機構を解明しつつあります。わが国でも年間1000人程度の患者が発生しており、感染を防ぐことができるようになれば、わが

国へも貢献できると考えています。

私は、熊本大学医学部を卒業後、在学中から興味を持っていた熱帯医学の道に進むべく、九州大学の研究室に入りました。そして、ワクチンや新規診断法の開発が重要と考え、九大の生体防御医学研究所で病原体排除や病態形成に関わる宿主の防御・免疫応答機構について学びました。

その後、米国留学などを経て、2009年5月に熱帯医学研究所の教授に着任しました。今後もこれまでの経験を生かし、現地と研究室の双方向から寄生虫疾患にアプローチしたいと考えています。

市民公開講座開催

市民公開講座「ウイルス感染症との闘い」を 11月9日に開催

長崎大学感染症共同研究拠点は日本熱帯医学会と協力し、11月9日、南アフリカ共和国国立伝染病研究所のヤヌシュ・パウエスカ博士による市民公開講座「ウイルス感染症との闘い」を開催します。

パウエスカ博士は南アフリカ共和国のBSL-4実験施設で、長年にわたり、高病原性ウイルスについて研究してきました。最近では、コウモリが宿主となっている人獣共通ウイルス感染症の調査を精力的に行っています。

グローバル化によってヒトやモノの国境を越えた移動が活発化すると同時に、地球温暖化が進み、私たちの暮らしをめぐる環境は激変しています。身近なところでも、国際クルーズ船で長崎市を訪れる乗客・乗員数は平成27年の約43万人から、2年後の29年には約105万人に



ヤヌシュ・パウエスカ博士

急増しており、これまでに国内になかった感染症が入り込むリスクは確実に高まっています。こうしたなかで、今回の市民公開講座では、BSL-4施設がどのように活用され、ウイルス感染症を克服していくことに貢献するのかを、BSL-4施設での研究経験の豊富なパウエスカ博士から、学ぶことができると考えています。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

講演テーマ：

『ウイルス感染症との闘い ～BSL-4施設の貢献～』

日時：11月9日（金）17:30～19:00

場所：長崎大学医学部 良順会館
長崎市坂本1-12-4

※日本語同時通訳付き、事前申し込み不要
※お問い合わせ 長崎大学感染症共同研究拠点

TEL 0120-095-819 FAX 095-819-2960